

記事読んで

「第6回みんゆう新聞感想文コンクール」には3部門に県内9校から970点の作品が寄せられ、審査の結果、各部門で最優秀賞1点、優秀賞3点、入選5点の入賞作品と学校賞3校が決まった。表彰式は12日、福島市の福島民友新聞本社で行われる。最優秀賞、優秀賞の受賞作品を紹介する。(原文のまま)

コンクールは、小・中学校で新学習指導要領に「新聞の活用」が明記されたのを機に、児童・生徒の広い視野と豊かな心を育む生き教材として新聞を活用、確かな表現力を身に付けてもらう目的で実施している。

「新聞掲載記事を読んだ感想」をテーマに、今年5月から8月までに福島民友新聞をはじめ日刊紙に掲載された一般記事や社説、コラム、連載企画、こども新聞などを読んで感動したこと、興味を持ったことなどの感想文を募集した。今回も、震災や原発事故、風評被害関連の記事をはじめ、復興や戦争、また環境に関する記事が多岐にわたっており、記事を読んだこと、自ら体験したことなどを踏まえての作品が多かった。

審査長を務めた福島地区小学校教育研究会国語部長の後藤修(福島市立金谷川小学校)が審査員が厳正に審査し、入賞作品を選んだ。

審査員次の通り。

審査員 後藤修(金谷川小学校長)、副審査員 藤原由美(澤井中教諭)、菅原千佳(平野中教諭)、菅野孝一(松島中教諭)、菊田文彦(東北中教諭)、渡辺浩一(二本松中教諭)、大沼一(安中中教諭)、渋谷朋子(野田小教諭)、藤原隆一(月輪小教諭)、佐藤史浩(東小教諭)、菅野純(福島民友新聞社編集局長)、渡辺誠(同社事務局長)

- 【小学3・4年生の部】
- ◆最優秀賞 八重樫佑希(野田6年)
 - ◆優秀賞 宮原由美(澤井中教諭)、菅原千佳(平野中教諭)、菅野孝一(松島中教諭)、菊田文彦(東北中教諭)、渡辺浩一(二本松中教諭)
 - ◆入選 大沼綾子(日新5年)、占部太提(桜の聖母学院5年)、松田香凛(日新5年)、浜田ひまり(桜の聖母学院6年)、佐藤愛莉(原町二6年)
- 【中学校の部】
- ◆最優秀賞 渡辺弥生(二本松一1年)
- 【小学5・6年生の部】
- ◆最優秀賞 小菅泰誠(桜4年)
- 【中学校の部】
- ◆最優秀賞 北信小(いわき市)、北信中(福島市)、石川中(石川町)
- 【小学3・4年生の部】
- ◆最優秀賞 宮原由美(澤井中教諭)
 - ◆優秀賞 菅野孝一(松島中教諭)、菊田文彦(東北中教諭)
 - ◆入選 大沼綾子(日新5年)、占部太提(桜の聖母学院5年)、松田香凛(日新5年)、浜田ひまり(桜の聖母学院6年)

「みんゆう新聞作文コンクール」は、今年で6回目を迎え、小中学校合わせて970点の作品が寄せられました。

全体を通して、新聞をきっかけに、興味、関心から、家族に尋ねたり、他の新聞や本、インターネットなどで調べたりして記事の文章だけでなく写真までも自分なりに確かめ、日常での出来事や家族とのふれあい、平和などについて自分の気づきや、成長について考えを深めているところが素晴らしいと感じました。

小学校3・4年生の部門では、生き物など身近な記事に興味を持ち、疑問に思ったことを家族に尋ねたり、別の記事を収集したり、図鑑やインターネットで調べたり、記事写真をもとに自分で絵を描いたりして、そこからわかったこと、さらに考



えを深めているところが素晴らしいと感じました。

小学校5・6年生の部門では、戦後の節目の年であり大々的に報じられた太平洋戦争に関する記事や、身近なことを報じた記事から自分自身の生活を見直したり、自分なりに決意したりしたことを素直に表現しているところが素晴らしいと感じました。

「自分で確かめ考え深める」

審査長、後藤修氏から、ご自身の経験をもとに、子どもたちに「自分で確かめ考え深める」ということを伝えたいと思います。

まず、新聞は、自分の生活や社会の出来事について、自分なりに決意したりしたことを素直に表現しているところが素晴らしいと感じました。また、複数の記事を読み比べて自分の考えをまとめたという記事や、疑問に思ったことを家族に尋ねたり、別の記事を収集したり、インターネットで調べたり、記事写真をもとに自分で絵を描いたりして、そこからわかったこと、さらに考



◆最優秀賞 「たとえ微力だとしても」

二本松一中一年 渡辺 弥生さん

「福島の空 不条理と闘った先人」。朝日新聞、四月二日の記事の見出しに、目引きつけられた。福島にいた、不条理と闘った人とは誰だろうか。興味をわき、記事を読んだ。

不条理と闘った先人。それは私の住んでいる二本松市生まれの歴史家、朝倉賢一だった。それを知り、私は驚いた。私も郷土の偉人である朝倉賢一のことには見聞きしていた。だが、これほどまで平和のために尽力した人だということは良く分からなかった。

博士はあの小村寿太郎外相に助言し、これ以上の犠牲を止めようとして行動した。しかし、博

木さんが身の危険を言しても伝えなかったのは、言語や人種を超えたと人とのつながりというパトンは、確かに渡り、紛争で傷ついた人々の心に伝わった。朝倉博士のように、そのパトンがうまく渡らない場合もあるけれど、きっとそのパトンは、渡そうとするこ自体に意味があるのだと思う。

世界には戦争や内戦や貧困で苦しむ人達が今もいる。私達はまだまだ平和な日本に生まれ育ち、戦争を知らずにきた。しかし、だからと言って、戦争を体験した方達の記憶を受け継ぎ、一歩踏み込んで想像することが大事だと思う。少しでも多くの人達が平和に暮らせる世界を作るために自分たちのパトンを創ることが、難しく、勇気がいることかも知れない。しかし、私達にもきっとそれはできるはずだ。



◆優秀賞 「想像」で考えるテロ」

本宮一中二年 菅野 真衣さん

なぜ、罪の無い人々を殺戮する事が出来るのだろうか。彼らも私達と同じ人間。一つの命が存在しているという事重大であり、他の何にも替えられない幸福なんだとはわかってはいるはずなのだ。これは、日本に住む人々には実感が湧かない事件だ。実際、この記事を見つめる私の頭のなかでは「想像」という機能が働いてくれているのだから。

今、私が見ている記事には「テロ死者千人 邦人重体」と記載してある。タイの首都バンコクで発生した爆弾テロ事件だ。二十人が死亡したという事実と並び、百二十六人の人々が負傷した。さらに、この報道で日本国民を不安へと陥れた事がある。駐在員の日本人男性が巻き込まれ、重体なのだ。幸い、意識はあり容体も安定しているという。日本の社会では到底考えられない事である。



◆優秀賞 「平和のために」

北信中3年 山本 景子さん

わたしは、「模擬原爆の模型展示」というワードが目に入った。オレンジ色の爆弾が大きく写真に写っているのが気になった。今年は戦後七十年なので、興味をわいて読んでみることにした。

その記事を読むと、そこには、終戦直前の1945年7月に渡辺地区に落とされた模擬原爆の实物大模型や、出征者の軍服などが展示されていたことが分かった。また、2015年、くまもと平和のための戦争展実行委員会事務局の菅野家弘さんは、「安全保障関連法案が参院で審議されている中、多くの人に戦争の実態を知ってほしい」と話している、と書かれてあった。そこでわたしは、実際に、母と姉と三人で会場である「ラッセン」へ行ってみることにした。



◆優秀賞 「平和を創るために」

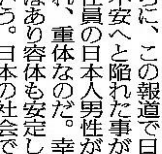
原町二中二年 宮原 由氣人君

「おばあちゃんのお父さんはね、シベリアで亡くなったらしいのよ。」

ふと、祖母が言った。手にはシベリア持ち帰った新聞が握られていた。父間は、軍服姿の曾祖父がやさしく微笑む写真がある。妻と四歳になったばかりの娘を抱いて、戦地に向かわなければならないなかった曾祖父。どんなに心残りだったのだろうか。極寒のシベリアでどのような最後を迎えたのか、どこで眠っているのか、今もわからない。記事には、スイソエフ方村の埋葬地の遺骨は、「酸性土で溶解」したり、埋められていた場所の「川が増水し流出」したりして回収

かを知った。そして、戦争中も戦争が終わってからも、後悔や差別などをつらい思いをした人がたくさんいるのを知った。

その一方で、日本が加害者としてアジアの周辺諸国の人々を傷つけて、苦しめていたことも知った。戦争では、勝っても負けても、たくさん人の心が休まなかった。悲しみを生み出す。寂しいのは、「戦争に『よい戦争』や『何のための戦争』はない。全て人殺し。』と話していたが、本音がそうだった。



私には普通の日常を過ごしている中でこの記事を見て、これが悲しく思った。今日が多岐にわたる平和を創りたい中で、私達の知り得ない所で残存事件が起きているから、死者を一人も出すような事件を起している犯人は、何を目的としているのだろうか。

この事件は日本ではない他の国で起きている。一時は大きく報道されたが、今となってはどうだろうか。この事件は日本人の記憶に残っているのだろうか。私達は実際に何が起きた時にしか思い出すことができないと思う。時間と共に忘れてしまっていて、普通の生活へ戻ってしまう。しかし、テロの恐怖から逃げられない。だからこそ、今考えてほしい。テロによって亡くなった人の事、テロの実態の事。テロで消えてしまった多くの物を取り戻す事は出来ないけれど、取り戻せようとする努力は出来る。あなたの「想像」の機能を動かさせて考えてみてほしい。

が困難になっていると書かれていた。曾祖父の遺骨も、日本に帰れないまま異国の土になっていくのだろうか。

「戦争の頃は、満州にいたんだよ。怒られた記憶がないくらい、優しい父だった。」

七十年経っても温かく残る懐かしい家族の思い出。そして、引き揚げなど悲しくつらい記憶。僕は、初めて祖母から戦争の話聞いた。

戦後七十年に開いて、新聞には戦争に関する記事がたくさん載っていた。空襲、沖縄戦、広島、長崎の原爆投下、南方の戦闘、特攻隊。戦争では、人の命がどんなに軽く扱われていた

を創るために、途上国の開発の努力を怠らないようにしようとして、平和を支えるために何が出来るか、しっかり考えて、平和を創る努力を怠らないようにしよう。

戦後七十年を過ぎても、祖母が曾祖父を忘れられないように、戦争の痛みを抱える人は残る。これからの平和を創っていくために、僕は、その痛みを忘れないようにしよう。

平和を支えるために何が出来るか、しっかり考えて、平和を創る努力を怠らないようにしよう。

中学生の部

戦後七十年を過ぎても、祖母が曾祖父を忘れられないように、戦争の痛みを抱える人は残る。これからの平和を創っていくために、僕は、その痛みを忘れないようにしよう。

平和を支えるために何が出来るか、しっかり考えて、平和を創る努力を怠らないようにしよう。

戦後七十年を過ぎても、祖母が曾祖父を忘れられないように、戦争の痛みを抱える人は残る。これからの平和を創っていくために、僕は、その痛みを忘れないようにしよう。

平和を支えるために何が出来るか、しっかり考えて、平和を創る努力を怠らないようにしよう。